

Repeating text pattern: 2019.3 / VOL.23

ボードレス・アートミュージアム NO-MA ニュースレター

増大版

特別報告 「2018 ジャパン×フランスプロジェクト」

展覧会レポート ときどき、日本とインドネシア

以“身”伝心 からだから、はじめてみる

GIRLS 毎日を絵にした少女たち

大西暢夫写真展 つくり手たちのこだわり

ABCcolumn

アール・スリュットを巡るコラム VOL.13

地域インタビュー

あの一ひとの近江八幡スタイル 八幡学区第三区自治会長 村岡 満徳 さん





湖南ダンスカンパニー

【ナント公演】2019年2月23日(土)、24日(日)  
会場：フランス国立現代芸術センター リュー・ユニック

【パリ公演】2019年2月27日(水)、28日(木)  
会場：パリ日本文化会館

主催：文化庁、障害者の文化芸術国際交流事業実行委員会、  
パリ市立アル・サン・ピエール美術館(パリ公演)、  
フランス国立現代芸術センター リュー・ユニック(ナント公演)

共催：独立行政法人 国際交流基金 JAPAN FOUNDATION

共同制作：フランス国立現代芸術センター リュー・ユニック  
パリ市立アル・サン・ピエール美術館



文化庁と障害者の文化芸術国際交流事業実行委員会(事務局はNOMAの運営母体である社会福祉法人グロー)が主催し、ナントとパリの2都市で開催された、障害者の優れた舞台芸術の公演が大盛況のうちに終了しました。本公演は、日本の魅力を、フランス・パリ市を中心に、大々的に紹介する複合型文化芸術イベント「ジャポニスム2018」の公式企画として位置付けられていました。

ナント公演に出演したのは障害者によるプロの和太鼓集団「瑞宝太鼓」。フランス人ダンサーのオリビア・グランビルとのコラボレーションで、和太鼓とコンテンポラリーダンスを織り交ぜた作品を披露しました。

日本からやってきた障害のあるパフォーマーたちは、パリ・ナントの2都市で熱狂的に受け入れられ、国を越えてフランスの人々の心を魅了しました。

特別報告

# 2018ジャポニスム×フランスプロジェクト

## 障害者の優れた舞台芸術をフランスから世界に発信

### ジャポニスム2018 響き合う魂 公式企画

文：山田創(障害者の文化芸術国際交流事業実行委員会)

ジャポニスム 2018

パリ公演終了後、パリ日本文化会館にて



瑞宝太鼓

ジェネシスオペンターテインメント

続くパリ公演では、瑞宝太鼓に加え、2団体が出演しました。車いすダンスグループ「ジェネシスオプエンターテインメント」そして、障害者とその支援者、振付家の北村成美、ピアニストの谷川賢作で構成される「湖南ダンスカンパニー」です。それぞれ圧巻のステージパフォーマンスを繰り広げました。

パリ公演初日には木寺昌人駐フランス日本国特命全権大使、2日目はMuriel Penicaud(ミュリエル・ペニコ)フランス労働大臣なども来場され、会場は2日とも満席。大臣はパフォーマンスを見ながらフランス語で最大級の誉め言葉「Formidable」と何度も仰っておられたそうです。



NO-MA2階ではインドネシアの作品を展示

「ときどき、日本とインドネシア」は、今年も折に触れてインドネシアとの交流を続けていきたいと思います。この展覧会のベースとなっています。この展覧会のベースとなっているのは、2018年10月にインドネシア国立美術館(ジャカルタ)で開催された「OKDOKO」日本のオール・ブリュットinインドネシア(主催：文化庁、障害者の文化芸術国際交流事業実行委員会)です。10月にインドネシアで、「これから折に触れてインドネシアとの交流を」と願った「OKDOKO」は、今年も経たないうちに「ときどき」として実現。これはもはや、「ときどき」ではなく「しばしば」ではないかと思えるスパンです。しかし、実行のチャンスがあったらそれを逃さず怒涛の勢いで物事が進んでいく感じは、作品調査等で訪れるたびに感じたインドネシアが持つ強いパワーに合っている気がします。



文：田端一恵  
(社会福祉法人グロー企画事業部副部長)

インドネシアの「OKDOKO」展では、日本の8人の作品を紹介しました。本展ではこれらの作品に加えて、作品調査で出会ったインドネシアの3人の作品も、それぞれの制作風景や暮らしている街の風景と共に展示しています。長年にわたって作者の下を訪ね歩いてきたNOMAのアートディレクターはたよしが作品の魅力発信するために紡いできた言葉の数々も、「OKDOKO」展同様に印象的な壁に展示しています。これはインドネシアの人たちと、私たちがどのような思いでオール・ブリュット作品の魅力発信してきたかを共有するために考えたものですが、日本の皆様にもNOMAが大切にしてきたことの原点を改めて感じていただけるのではないかと再現しました。そして、インドネシア作品調査からの協力者であ



「ときどき、日本とインドネシア」  
2019年3月2日(土)~6月2日(日)

展覧会の詳細情報は、  
裏表紙「開催中の展覧会」をご覧ください。



ここでは、北澤潤さんによるプロジェクト「Momentary Museum」を見ることができる

る美術家の北澤潤さんが、この調査の過程とインドネシアの「即興的な文化」に着目して考えたプロジェクト《ひとときのミュージアム(Momentary Museum)》も「OKDOKO」展に続き、賑やかに会場を飾ります。

実は「ときどき」がタイトル案として上がったのは、冒頭に記した理由とは別にあります。日本にレジデンスしたことがあるインドネシアの若手陶芸作家に「日本語の中で、可愛らしく響く言葉は何?」と聞いた時に返ってきたのが「ときどき」。この裏話は、この記事を最後まで読んでくださった方だけの特典です。





テーマは「身体」

2018年秋、展覧会「以「身」伝心からだから、はじめてみる」を開催しました。タイトルは、以心伝心の2文字目の「心」の字を「身」に変えた造語です。本展では、最も身近な存在でありながら、実はよく知らない身体を巡り、8組の作者の表現を紹介しました。

1階ギャラリーで展示しているのは、失明する前の記憶に基づき、陶器で思い出深いものを再現する徳山彰、自身の体調の変化を独自



「以「身」伝心からだから、はじめてみる」  
2018年9月22日(土)~11月25日(日)  
ボーダレス・エリア「近江八幡」をみんなで作るプロジェクト

主催：アール・ブリュット魅力発信事業実行委員会  
後援：滋賀県教育委員会、近江八幡市教育委員会  
助成：平成30年度 文化庁  
地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援事業

の解釈を用いて絵にして記録するH、また森田寅による重度心身障害者など自分で姿勢の保持が難しい人に向けた補装具を展示します。メディアもスタイルも三様の彼らですが、作る過程において構造を意識して形を導き出すという共通点があります。

続いて蔵に移るとここでは、菊池和晃+にしなつみによる、抱き合う裸の2人を映した写真作品に出会います。ここでは身体性と

とともに、夫婦関係がラディカルに表現されています。

2階の和室では、草薨陵太による鮮やかなドットで覆われた作品を展示していました。制作の様子を映した映像とともに観覧することで、ペンで紙面を打つという、身体感覚から生まれる表現があることを知ることができます。

そして第2会場は、江戸時代後期の建物である奥村家住宅です。近江商家の往時をしのぶことができるこの会場では、家屋の生活空



触ることができない平面作品は、輪郭を浮き立たせた立体コピーを作成し触れるように

間を存分に活かした作品に出会えました。あたかも座敷障子昔から棲みついている——と錯覚させるほどのリアリティを放つ鎌田紀子による人形。母屋と蔵に囲まれた広々とした庭と呼応するように、空間的に展示した米田文の陶器。また、身体のフォルムをダイナミックに捉える伊藤賢士の作品は、会場に点在するように展示しました。

### 耳と手で観る、NO-MAと近江八幡

展示に併せて「耳と手で観る、NO-MAと近江八幡」というプロジェクトも行いました。このプロジェクトは視覚情報で行われる「観る」という鑑賞行為を、「耳」聴覚と「手」触覚で体感してもらい、視覚以外の感覚で展覧会と地域資源の魅力を感じてもらおうという目的を持っていました。

このため、NO-MA会場では、展示内容と合わせてお聞きいただける音声コンテンツ(作者インタビューや作品に関連したオリジナルストーリーなど)や、触ることのできる展示物(陶器作品や郷土に所縁のある資料など)を楽しむことができます。仕掛けを用意しました。

本プロジェクトを通し、視覚情報報がその大半を占める美術館という施設において、目が見えない人も含む誰もが、一緒に展覧会と周辺地域の魅力にアクセスできる環境を生み出すことに挑戦しました。

### サポーターたちの活躍

これまで、NO-MAでは地域にお住まいの方を中心とした、ボランティアの方々に展覧会運営のサポートをいただけてきました。この展覧会では、展覧会を「みんなで作る」ということを目標とし、運営補助にとどまらないサポーターのあり方の種類を増やし、多くの方々に参加いただきました。各サポーターのあり方については、以下の3種類です。

### ボーダレスなチャレンジを皆さまと

この展覧会には、ボーダレスなチャレンジに満ちていました。プロジェクト「耳と手で観る、NO-MAと近江八幡」で、誰もが美術館にアクセスしやすい環境を整備する「鑑賞」のあり方を検討したことや地域の資料を紹介したこと。さらには、展覧会づくりのプロセスを一緒に経験したキュレーションサポーター、記者として情報発信

### の担い手になるNO-MA記者ク

ラブなど、サポーターたちとの新たな連携により、館の内外に関わらず、一緒にプロジェクトを行っていったことも、大きなステップの一つになりました。

これからも、近江八幡という素敵な町の美術館として、皆さまの協力をいただきながら、ボーダレスなチャレンジを続けていきたいと思っています。

### <3つのサポータータイプ>



#### NO-MA記者クラブ

展覧会にのりを書いてみたい方や、地元のユニークな魅力を自分の言葉で発信したい方を募集しました。記者としての経験のない10名の参加者が取材を行い、書いた記事をInstagramや壁新聞、フリーペーパーで発信しました。  
(写真：NO-MA近隣の歴史についてインタビューを行う記者)



#### キュレーションサポーター

NO-MAと協働して「以「身」伝心」展の企画制作に携わるサポーター。展覧会を構想する上での理論を知る講習や作品制作の現場や地域資源のリサーチなど、実践的プログラムを通じてキュレーションに必要なスキルを学びました。  
(写真：展覧会の企画書を作ってみるプログラムに集中するサポーター)



#### 会場ボランティア

会場チケットの確認や監視などをする会場ボランティア。魅力あふれる作品を案内することに加え、来場者や他のボランティアとの交流もこの活動の楽しさでもありました。  
(写真：鎌田さんの人形の作品とボランティアの2人のスリーショット。大西暢夫撮影)

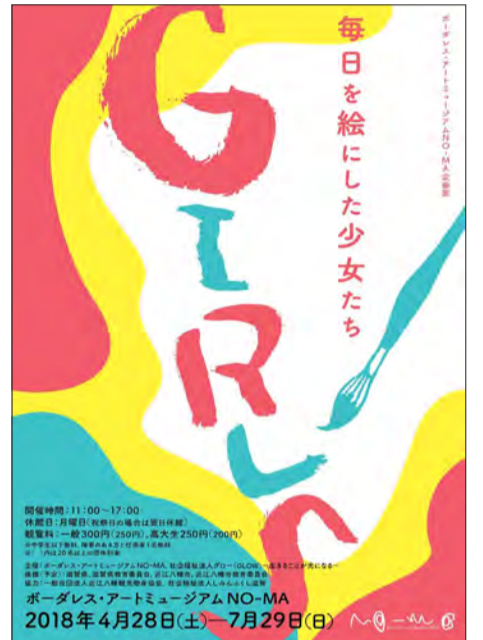




2018年4月末、うららかな春の雰囲気にとびつたりりの展覧会「GIRLS 毎日を絵にした少女たち」を開催しました。出展者、塔本シスコ、仲澄子、土方亥いの3名の女性。大正時代に生まれた3人は、二度の大きな戦争のあった激動の時代をしたたかに生き抜いてきました。

彼女たちには、不思議な共通点があります。それは、歳を重ね、高齢になってから、堰を切ったように、大量の絵を描き始めたということ。描かれたのは、少女の頃の思い出から、おばあさんとなるまでの、人生のありとあらゆる瞬間です。そして彼女らの絵は年齢を重ねてなお、天真爛漫な少女のよう。ときめきに満ちていました。

NO-MAの1階に展示された



「GIRLS 毎日を絵にした少女たち」  
2018年4月28日(土)～7月29日(日)

【出展者】塔本シスコ、仲澄子、土方亥い

主催：ポータル・アートミュージアムNO-MA、  
社会福祉法人グロー(GLOW)  
後援：滋賀県、滋賀県教育委員会、近江八幡市、  
近江八幡市教育委員会



塔本シスコ「ネコ岳 ミヤマキリシマ」

ズで描かれていたりします。その奔放さは観る者の意表を突くとともに、描きたいものを描きたいように描いた多いさんの魅力を感じさせてくれました。

2階に展示したのは、仲澄子。仲の作品は、「すみばあちゃん」の思い出日記と題された人生の膨大な記憶を絵と言葉で紡いだものです。この絵日記は、なんと90歳の誕生日を機に描かれたものだといえます。育ての親に給を買ってもらったことや、新婚の頃の料理の失敗談、戦争時代の日々、自分の娘たちのユーモラスなエピソード、そして、かわいらしいお孫さんたちのこと、絵に描かれたライフストーリーからは、すみばあちゃんのかわいらしく、つつましく、そして美しい生き方が伝わってくるようでした。



座布団に座りながら鑑賞できる仲作品



職人の手で作られたモノと大西の写真

NO-MAで2度目となる、大西暢夫の写真展。大西は、全国津々浦々で、写真撮影、映画製作、執筆といった活動をしており、取材対象となるテーマは「精神病院閉鎖病棟」や「東日本大震災」など多岐にわたりますが、今回のテーマは、「つくり手たち」。大西がこれまでカメラに収めてきた様々な「つくり手」と、彼らが作った製品や作品も展示しました。

まずNO-MA1階に展示されたのは、大量生産的な機械技術に頼らず、伝統的な製品を自らの手でつくり、その歴史を守る職人たちの写真。会場には硯や包丁といった製品も並びます。大西の写真からは、職人たちの真剣な表情が伝わり、製品からは彼らの長年にわたる研鑽がにじみ出ているよ

うに感じられました。

次に、2階に展示されたのは、オール・ブリュットの作者2人。陶器で作品を作る澤田真一と、木製の人形を作る西本正敏です。2人の創作は、職人のそのように基本的に「誰かの役に立つために行われるものではなく、自らの創作への思いの発露として行われるものです。しかし、そこにかける思いの強さ、そして緻密なこだわりは、職人たちとも大いに共通する部分があり、大西の写真に見える彼らの表情は、まさに「つくり手」という言葉がふさわしいといえると思います。

最後に、蔵に展示されたのは、独学で木彫の仏像を制作する荒木勝美。荒木は、定年退職後に仏像作り始めたので制作歴としては決して長いとはいえません。ですが、荒木の仏像の表情は、なんととも形がすがたにやさしさに満ちていて、経験の深淺を越えて、伝わってくる情感があります。そんな荒木を捉えた大西の写真は、仏像の背後でスクリーンにスライドショー形式で映し出されました。真摯に仏



荒木の木彫、独特のあたたかみに満ちている



ポータル・アートミュージアムNO-MA地域交流事業

大西暢夫写真展「つくり手たちのこだわり」  
2018年8月25日(土)～9月17日(月・祝)

主催：ポータル・アートミュージアムNO-MA、  
社会福祉法人グロー(GLOW)  
後援：滋賀県、滋賀県教育委員会、近江八幡市、  
近江八幡市教育委員会

像に向き合う荒木の姿から「人がものをつくる」ということの尊さを感じる空間になったと思います。大西の写真は、ビジュアルの力もさることながら、そこに生きる人たちの気持ちや思いといった背後のストーリーを紡いでいます。それは実際に現場に赴き、取材対象となる人たちのことを心から知りたいと思ひ、彼らが抱える課題や、胸に抱えている思いを聞きだしていく、大西の手で押すシャッターにしか映らない写真であると思います。そんな大西の写真が深くとらえ、たつくり手たちの肖像と、彼らが実際に作った製品や作品が、人とモノを架橋する「作る」という行為の神性を感じさせる写真展となりました。



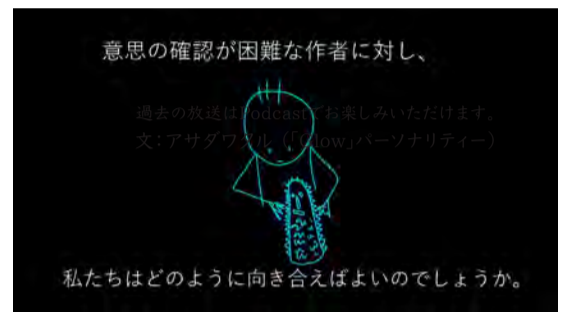
## 意思の確認が困難な作者の 作品を展示すること ——「意思決定支援」という考え方

文：山田創(社会福祉法人グロー)



今回から2回に渡り、NO-MA学芸員が社会福祉法人グロー(GLOW)の研究発表フォーラム(2018年12月2日)でプレゼンテーションした内容をベースとしたコラムをお届けします。

▼プレゼンテーションで使用したスライド



「当事者が展示してほしいと思っ  
ているかどうかなんて分からない  
のに、なぜ作品として美術館で展  
示をするのでしょうか？」

しばしば、このような発言を耳  
にします。その度、NO-MAの学  
芸員としてこの質問に対し、どの  
ように答えればよいかと考えてき  
ました。

私たちが作品の展示をお願いす  
る障害のある作者の中には、自分  
の作品が展示されることについて  
どのように思っているのかの意思  
確認が難しい人たちが多く、先の  
発言は重要な問いかけをはらんで  
いると感じていました。果たして、  
意思の確認が困難な作者に、NO-  
MAは、どのように向き合えばい  
いのでしょうか。

福祉の世界の概念に「意思決定  
支援」というものがあります。障害  
の特性により、本人が自らにとっ  
て最良だと思われることを判断で  
きない、また思いがあっても伝わ  
るように意思表示できない、とい  
ったケースに際し、支援者が当  
人の嗜好を推定し、不利益を被ら  
せないことなども勘案しながら、  
本人の意思決定することを支援し  
ていくというものです。

ここで、私の先輩の横井悠学芸  
員と知的障害を伴う自閉症のある  
作者であるYさんとのエピソード  
を紹介します。横井学芸員は、Yさ  
んに会場の写真を示すなどして展  
覧会を説明し、「この作品を展示し  
てもよいですか？」と聞きました。

するとYさんは「展示する」と答え  
たので、横井学芸員は「じゃあ、受  
け取ります」と言って、作品を手  
取ろうとしましたが、Yさんは手  
を離してくれませんでした。Yさんの葛  
藤を感じた横井学芸員は、「やっぱ  
り展示するのやめましょうか？ 大  
事なものなので」と手を離すと、Y  
さんは「展示する」と作品を差し出  
しのですが、やはり手は離さない  
まま。このようなやり取りがしば  
らく続いた末、最終的にYさんは  
大きな深呼吸を1つして、ひと思  
いに作品から手を離し、出展の意  
思を固めました。

矛盾する気持ちを抱えていた様  
子のYさんに対し、横井学芸員は、  
出展を依頼する立場でしたが、強  
要することはせず、Yさんが様々  
な選択肢を熟慮できるよう「出展  
しなくてもいい」という選択肢も  
提示していました。一義的には横  
井学芸員は出展を交渉しているの

であり、Yさんの支援を行ってい  
るわけではありません。しかし、出展  
するという方針を2人で決めてい  
くそのプロセスには、意思決定支  
援の要素を含んでいるとも思えて  
きます。

誰か別の人間が本人の意思決定  
を支援する——そのためには、  
しっかりと相手を観察し、発せら  
れる情報を慎重に受け取り、方針  
について熟慮する必要があります。  
これは非常に難しく、責任の重い  
支援の形だと思えます。そして、正  
解が用意されているものでもない  
とも、けれども、意思として表示さ  
れず、本人の心を押し量っていく  
この支援には、初めの問いかけに  
答えるための、重要な示唆が含ま  
れていると感じています。

後日談として、展覧会場で自分  
の作品が展示されているのを見た  
Yさんは、その風景をまた絵に描  
き、その絵も会場に飾られること  
になりました。Yさんの思いを言  
語化することは難しいです。しか  
し、絵という形をとった思わぬリ  
アクションは、Yさん側からNO-  
MAに送られた素敵なお知らせジ  
だと感じました。

(次号に続く)

### 地域インタビュー ohmi-hachiman local interview

ヴォーリズ建築に住み、  
町を見つめる

八幡学区第三区自治会長

村岡 満徳 氏

文：藤原顕太(自立生活支援員)



近江八幡の町を歩くと、江戸時代か  
らの古民家と混じって、あちこちで特  
徴的な洋館と出会います。品格があり  
ながらも、お洒落で、どこか懐かしい  
雰囲気のある建物。これらはおもに大  
正から昭和にかけ、近江八幡を拠点に  
活動したウィリアム・メレル・ヴォーリ  
が手がけた建物です。

今回お話を伺った村岡さんは、そん  
なヴォーリズ建築の建物に、小学生の  
ときに引っ越してきた方。昭和初期、当  
初は診療所として建てられたという村  
岡さんの邸宅は、片側が洋館、もう片

側が日本家屋という、和洋折衷の珍し  
い形式です。

ヴォーリズ建築ということを知った  
のは住み始めてからだったという村岡  
さん。「新しいお家の方が、間取りも良  
くてはるかに住みやすい」と話されな  
がらも、邸内を見せてくださり、特徴と  
魅力を教えてくださりました。中でも村  
岡さんが特に印象的に感じるのは、階  
段だそうです。「昔の日本の家の階段  
は、勾配が急ですよ。でも、ここの階  
段は、一段一段が低く、登りやすい。近  
所にあるアンドリュース記念館や安土  
にある旧伊庭邸の階段も同じヴォーリ  
ズ建築で、角度や雰囲気が、ここと同  
じものを感じます」。

実際に階段を見せてもらおうと、確か  
にゆるやかで、上りやすい！また、階段  
の丸みや手すりなどに、どこことなく温  
かみを感じます。また、床のタイル、ド  
アの取っ手といった建物の一つひとつ  
のパーツが醸し出す雰囲気も、ヴォー  
リズ建築に感じる特徴だとのこと。

「私の息子が小学校の時、  
同級生とかが泊まりに来ると、『この家  
は落ち着く』って言うことが度々ありまし

た。ヴォーリズが建てたから落ち着く  
のか、古い家だから落ち着くのかはよく  
わかりませんが、建物の素材が持つて  
いる雰囲気は、住みやすさともつなが  
るところがあるのでは」。

村岡さんが最後に話して下さった  
のは、近江八幡の町中の建物について  
でした。「建物は使わないと傷むと聞  
きますが、年々不在の家が出てくる。こ  
の家を潰したくない、でも維持していく  
ことは難しい。そんなとき、例えば1年  
に1回、誰かに貸して使ってもらったり  
。それだけでも全然違ってくる。そうや  
って場所を維持していくというやり方  
もあるとかがえることがあります」。

最近では、観光に来た人たちが玄関  
の前で家を眺めているとき、中に入れ  
て案内をしたこともあったそうです。

村岡さんのご自宅▼

写真手前は日本家屋、奥は洋館になっており、  
渡り廊下でつながっている独特のデザイン。



←一段一段がゆるやかに設計された階段。  
落ち着いた風格で、和やかな印象を与える。

## あのひとの 近江八幡 スタイル





## NO-MA関連メディア

.....&lt;NO-MAグッズのご案内&gt;.....



## NO-MAグッズ

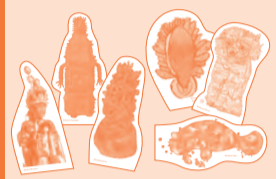
トートバッグ、クリアファイル、一筆箋

アール・ブリュットの作品画像を用いた一筆箋やトートバッグなど、NO-MAの店頭やホームページからお買い求めいただけます。

トートバッグ 1,000円

クリアファイル 380円

一筆箋 380円



.....&lt;NO-MA企画展グッズのご案内&gt;.....

2018年4月~2019年3月までの間に開催した展覧会のカタログとポストカードを販売しています。

各展覧会図録



.....&lt;ラジオ番組バックナンバー&gt;.....



アール・ブリュットなど、「福祉」から生まれる様々な表現の可能性について考えるトークラジオ。

## Glow ~生きることが光になる~

※放送は終了しています

2018年3月に終了したラジオ番組「Glow~生きることが光になる~」のバックナンバーを、ボーダレス・アートミュージアムNO-MAのホームページからお聞きいただくことができます。過去4年半にわたり、放送してきたすべての回が視聴可能です。ぜひお楽しみください。

<http://www.no-ma.jp/radio.html>

## 【担当者の編集後記】

本号の企画会議で、簡易的に紙面サンプルを作って「こんな構成でいかがでしょう」と見せてみたら、みんなが呆れた顔をしている。「いやいや、野間の間は右綴じでしょ」

内容以前に綴じ方を間違え自分を見失ってしまっていた。どうにも私は「左右」に弱い。「そこ右折して」と言われた直後に左折して、怒られたことが何度もある。人から言わせればありえない間違いだそうなのだが、私にとって瞬間に左右を見極めることは、フラッシュ暗算のように難易度が高い。

原因ははっきりしている。小学一年生の教室だ。まだ左右のおぼつかない児童のために、黒板の端っこには、それぞれ「みぎ」「ひだり」と書いた紙が貼ってあった。私の記憶が正しければ、その黒板にはこの世の常識では右とされている方に「ひだり」と貼ってあり、左とされている方に「みぎ」と貼ってあった……気がしてならない。追憶の中の教室があまりに明瞭なので、私が間違っているとはどうしても思えない。しかし、担任の先生が誤って貼ることはまずないから、百歩譲って、きっと私の思い違いなんだろう。

でも万が一、もし先生が間違っていたのだとしたら、きっと母校の卒業生たちは、右折と言われれば左折をし、野間の間を右に綴じてしまおうだろう。(Y)

## 開催中の展覧会

## ときどき、日本とインドネシア

2019年3月2日~6月2日

🕒 11:00~17:00

💰 一般300円(250円)、高大生250円(200円)

中学生以下無料 ( )内は20名以上の団体料金

## 【出展作家】

アフマッド・ヤニ/ドウィ・プトロ(バク・ウィ)/戸来貴規/イマム・スチャヒョ/岩崎司/木本博俊/木村茜/三橋精樹/佐藤朱美/山崎健一/吉澤健

【パートナーアーティスト】 北澤潤

主催:ボーダレス・アートミュージアムNO-MA、社会福祉法人グロー(GLOW)~生きることが光になる~  
後援:滋賀県、滋賀県教育委員会、近江八幡市、近江八幡市教育委員会  
協力:一般社団法人近江八幡観光物産協会、社会福祉法人しみんふくし滋賀

## 展覧会レポート

文:高山円(本展担当)

## 第15回滋賀県施設合同企画展「ing... ~障害のある人の進行形~」

本展では、30か所に及ぶ県内の福祉施設あるいは特別支援学校の担当職員が一堂に集まり、実行委員会で作品の魅力や背景を語り合いながら展示案を練り、実際の展示も職員自らの手によって行う展覧会です。そこに、NO-MAの学芸員や美術家でアドバイザーの野原健司氏が入ることで別の角度からの視点も加わっています。

今回は、45名の作者を前後期に分けて展示を行いました。前期では、雑誌をくしゃくしゃにしているようで、造形の美しさを感じさせる作品やペットボトルに色々な素材を入れる作品。後期では、重症心身障害の方のひっぱる力に着目して1年がかりで布にペイントされた作品やグルーガンからカラフルなグルーを絞り出した作品など、作品そのものというより、それが生み出される行為に惹きつけられるようなものも見られました。多くの作品は、彼らの傍らに寄り添う支援員、教員の眼差しにより「おもしろい」「美しい」「彼ららしい」と見いだされて出展へと繋がっています。

それらの作品の中には、会期行った「いつでもだれでもワークショップ」で作者の創作を体験できるものもあり、より作品や行為を通して作者を身近に感じていただける展覧会となりました。

## 第15回滋賀県施設合同企画展「ing... ~障害のある人の進行形~」

前期:2018年12月1日(土)~2019年1月14日(月・祝)

後期:2019年1月19日(土)~2月24日(日)

【主催】第15回滋賀県施設合同企画展実行委員会  
ボーダレス・アートミュージアムNO-MA

これまでボーダレス・アートミュージアムNO-MAを運営してきた「社会福祉法人滋賀県社会福祉事業団」は、2014年4月「社会福祉法人オープンスペースレガート」とひとつになり、「社会福祉法人グロー」となりました。



ボーダレス・アートミュージアム NO-MA

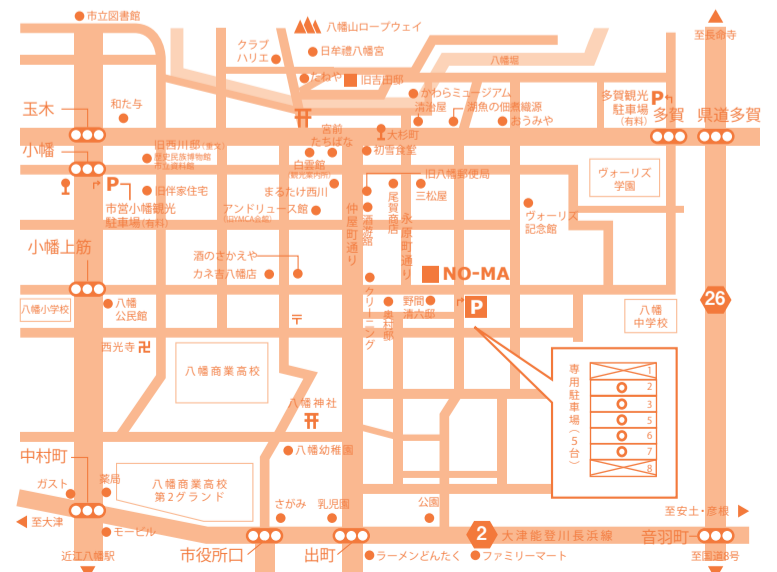
滋賀県近江八幡市永原町上16

TEL/FAX 0748-36-5018

休館日:月曜日

(月曜日が祝祭日の場合は翌日休館)

E-mail no-ma@lake.ocn.ne.jp

<http://www.no-ma.jp>

バス JR近江八幡駅から近江鉄道バス(長命寺行き)大杉町バス停下車 徒歩10分

車 名神高速道路・竜王ICより「近江八幡・国道8号」方面へ。国道8号「西横関」右折、「東川町」左折。県道2号「小船木町」右折、「出町」左折。(計30分)